

創作

若い人々

文三甲二 松 井 武 州

1

月が高く昇るにつれて夏の夜の空虚な誘惑が、ゆるやかに迫つて来る寂寥の中で静かに砂丘を包んで居た。淡い黄色の待宵草に海の微風が渡つて青い月光が露の玉の中で崩れると二人はいつもの様になだらかな傾斜を断崖の方に登つて行つた。

「清らかな月だね。丁度——」。

「丁度私達の仲見たいに？」

「プラトニッククラブつてのかい。ふん、満月の夜には嵐の豫感があるものさね。」

「……………」

「美しいさ、此以上美しく見ゆるものはない。醜くなるまいと苦勞許りして——」

「プラトニックつて續けられるものかしら」

「そりやあ解釋の仕方一つでだ。」

突然令子の瞳に、澄んだ月をきらりと睨んだ哲夫の瞳が大きく映ると、危く保つて居た心と心の平衡は脆くも破れた豊かな潮は案外手軽に、しがも力強く押上つて來た。岬を迂廻する速い潮流の様に、柔はらかな肉の悲鳴。昂まる動悸の一々くを鋭く數へながら崩れ逝く中に潜んで居る哲夫の情熱を今更の様に感じた令子は美しく身震ひしながら月光を勢一杯吸込むと砂の上にクタ／＼と坐込んで仕舞つた。圓ろやかな、柔らかな脚に嚙付く砂粒の荒々しさに呼覺まされた官能の悲鳴に堪ゆるために令子は突然一握の砂粒を哲夫の手の甲に押付けた。だん／＼力を籠めて、憤みを忘れた子供の様に。砂粒の間を流れる熱い脈搏に二人は押黙つて居た。唯眼と眼が退引きならぬ大膽さを示して居た。露を含んで輝いて居た令子の瞳は見る／＼中に渴いて行つた。美しい、甘い、柔らかな光が消れると哲夫は憂鬱な恐怖に襲はれて靜かに手を離した。令子は素早く情を籠めた一瞥を不服と非難と感傷の中から送つた。受取つた哲夫が複雑な表情の中で悲しさうに、狂ほしさうにうなだれて行くのを見詰ながら令子は二人の間に近寄り難い溝が擴るのを寂しく考へて見るのだつた。

純に美しく、正しいと信じて熱い感情を取交はして來た私達なのに、此の一年間なのに。光と影に満ちた私の心の日記。どうして不安なの。どうしてぐらく／＼して來たの。まあ何て分らない私の心なんでせう。此の上は卑しい言葉に頼る他はない。それとて確かな證明は誰が出來やう。悲哀のヂイレンマだわ。逃られさうにない嵐だ。

令子は虚な微笑をにやりとやつた。

「話つてなあに？」

「なあに？」

「ほら先刻皆で話合つてた時にそつと云つたぢやないか。皆の前ぢや云へない事かい。想像はついてるんだがね。」
「佛島にね。」

「うむ。セイリングつてんだらう。ヨットは面白いだらうよ。」

「あら、だつて津田さんが是非つておつしやるんですもの。今晚いらつしたのもその事なのだ。」

「それで？」

「お父様は、唯笑つてらしたわ。」

「……………」

「母様はお天気を心配してらしたわ。」

「君は。」

「どうでもいいの。そりやあ。あの島は面白いには面白いつて事だけれど。」

「行き給へよ。君の自由さ。」

「不二子つたら行きたい癖に行きたくないつて言ふんですもの。」

「何故君は偽るんだ。行きたいつて言へないんだ。行きたいと！」

「……………」

「僕は言ふよ。君を行かしたくない。とね。誰が行かせたいもんか。——だが……………」

「行くわ。哲夫さん！私行つて来るわよ」。貴男が反對だつて、私行つて来るわ。」

二人は始めて暖い微笑を取交した。然し消ゆ様とする焰の様に何か儂ないものが靜かに匍寄つて來た。二人はせめて別れる迄此の暖さを取逃すまいと努力しながら今來た砂の途をびつたりと寄添つて歸り始めたが、お互に虚勢なのを痛ましく感じて居た。最早沈黙は何の意味も示して居なかつた。

二つに分れた心と心の奥から寂しく眺め合つて居る愛情だ。じり／＼迫つて來る破綻の前兆だな。澄切つた月の面に何か怖しい影が見ゆる。あの晩もやはりこんな月だつた。何も言はなかつた。につこりしたらにつこりし返したんだ。つけ。——君チヨコレートは好きなの。“わー、いいわね。”——さうだ。今晩は踏切ん所の菓子屋を叩き起してチヨコレートを存分に買つて歸らうかな。いや駄目だ。焦つても落着いても駄目だ。令子との間にはもう悲しみの時は過ぎ去つて居る様だ。一年以上の仲だのにたつた二週間で致命的な溝が出来るなんて！俺が學生で津田が若い會社員。これだけで打負かされたのが不思議でなくなつたのは又どうした事だ。津田、令子、ヨット、きつとあの赤帆の二枚帆だな。上手廻しの北々東、下手廻しの東々北、一つの風手が齎らす二つの針路。針路から針路への急旋回に飛沫の中でスリルに叫ぶ令子だらう。針路から針路へ、生から生に、滅びた針路に造作もなく死を與へてか。まるで忘れられた友情とも言ふ様に。妖婦奴。何時何處で習得したんだ。あのしほらしい目付きの中に悪夢の女王を溢へて濱中の男達に子供染みた鬪争心を起させる。黒と白のあの水着の下で上品にくねつて居る美の標準曲線は、憧れに満ちて純な少年の心迄羞恥の中で濁さずには居ない。美しい！いや醜い令子奴。俺の目前でなやかに呼吸して居るだけで既に壓倒して居る令子！たとへ全精魂を犠牲にしてもあの香はしい魅力の百分の一も把へる事は難しい。忌はしい幽霊だ。愚鈍な狂亂だ。俺の純情がどの位に引裂れ、吸取られて仕舞つたか。若し令子が知つたらばきつと涙を流して、否。流して見せながら

血に彩どられた襪への小羊を愛撫して生々しい愉悅に耽けるだらう。令子、死んで仕舞へ。さあ俺の少年時代の歴史を呉れて遣る。純情と純情、二人の瞳と瞳、神秘的な光に、胸の扉に開放たれり。神秘はあばかれぬ。滅びろ令子——滅亡は空に消逝く樂音の如く萬物を神に還元する。——か。最後だ。こうして二人して歩くのはこれが最後かもしれぬ。噫、初夏の香はしいあの微風、ほの暗いあの道を、醒めきらぬ音楽會の興奮に、遠廻りをやつて街から街に、二人して語合つたあの夜の詩は。一体あの夜の詩は何を告げたのだ。今となつては一切の歴史は悪夢だつたのか。何故だ。運命等糞喰へ！俺の偽り。津田に對する令子の偽りの反抗。よく知つてるんだ。どんなに見せたつて。駄目だ。偽りに愛情の表現を求め此の頃だ。それにしても俺は何故津田を憎まないのだ。令子を愛してるからか？令子を奴隷にしたいためか？奴隷にするかされるか此の一年間どんなに戦つたらう。激しい情熱を現はしたらう。令子は津田を奴隷の様に屈服させるのをひそかに希つてるのぢやないだらうか。津田の奴隷順と微笑で漁夫の利と來やつた。津田など憎みたかあない。苦しい自惚れだな。いやそんな餘裕があるものか。お互に津田については一言も口を切らうとしない憂鬱な恐怖、これが消れる時こそ万事は終りだ。焦るまい。落着いたつて駄目だ。ブラトニツクの破綻、月宮殿は昔から死人の氷人が住むもんだ。噫、何と云ふ重苦しい此頃だ。何と云ふ狂ほしい今晩だ。黙つて居る令子、何を考へて居るかが分るだけに狂ほしい。戦へば戦ふだけ、いや、切れた堰だ。新しい針路へ急旋廻したヨットだ。忘れ去つた友情とでも言ふもんだ。令子よ、滅びろ！せめて獨りで死んで呉れ。

「哲夫さん。」

「……」

「不二子が貴男の事を始終噂するわよ。」

「可愛い人だね。従妹同志の癖に君たあ正反對な所がある。」

「こんな所を見付かつたら……」

「止し給へ！」

「……………」

「一体全体今晚は何のために散歩してるんだ。ちぐはぐだ。衝動以外に何にも進んでやしない。壊はれかかった機關車ぢやないか。」

「……………」

「明日はお互に考へるんだ。君にも面白い許りのセイリングでもないだらう。」

「津田さんも不二子も別々な意味で明日を待つてるでせうに。」

「令さん、もう左様ならをしよう。考へるんだ。」

「哲夫さん。」

「おやすみ！」

砂丘のスロープを小走りに歸つて行く哲夫の姿を痛々しく令子は見送つて居た。

遺瀨ない苦惱を刻み込まれた令子は瀟洒な貸別荘の門迄たどりついて、絡んで茂つた豆蔲の葉蔭から涙ぐんだ眸を上げると中天に冷たく冴けて居る月を眺めながら右手を高くかざして立つて居た。不二子の手らしいギターの旋律に感傷

に浸されて居る令子の耳に、突然人の世の荒波の反響の様に、悲鳴の様に岬の方から波の遠鳴が聞へ来た。

此の爪、此の指、哲夫さん誰だと思つて？此の美しい指に眞先に口吻けるのは。誰だらう。津田さん、哲夫さん、山の中の湖水の様に一体私の胸を幾つの峰を映せば満足出来るのだらう。映して碎き、映して碎き、それでもひそやかに又映る。一ヶの峰と湖水。純な心の平和は何處に行つたのだらう。避暑氣分なのかしら、それともつと眞面目に起つて来た運命なのかしら、薄氣味悪い波の遠鳴りだこと。世の中全体が奏して居る様なあの音だわ。私は到底獨りであの潮流の中に生きて行けさうにない。力だ。力、力、冷たい月光にギターの音に夢を見て居た静かな光景は不二ちゃんの憧れなんだわ。哲夫さんが見詰めて居る世の中だわ。靜かな清らかなさうして美しい。駄自だ。プラトニックに叛逆。哲夫さんを裏切る事は私の純情を捨てる事だらうか。動いてる世の中だもの、私はちつとしちや居られない。哲夫さんの慎みに飽足らないんだもの。一体プラトニッククラブなどあるものかしら。ある。何故つて言つても分りやあしない。修道女見たいに男を悪魔の子の様に……悪魔だつてかまふものか。純情に瀆過されたならば決して悪魔ぢやない。獸の眞似ぢやあない。美しい心から出發するんだもの。噫！どうした事だ。二人を愛してるなんて。哲夫さん、津田さんこれでも眞面目に起つて来た運命なのかしら。假面の人生だわ、苦惱の一年。でも平和だつた哲夫さんとの一年。純な人だわ。時々恥しい私の心だつたわ。あの人は随分黒好みだつたつけ。私迄何だか黒っぽいドレスを選び始めちやつて。あの人がだつて私の好きな野菊好きになつてたに。これでも調和した運命かしら？何故飽足らないのだらう。嫌だ、何んて嫌な私の心だ。私が哲夫さんに望んで居るもう一つのもののはあの人以外の男でも持つて居る。私はもつと氣位が高い筈なのに。御免なさい、哲夫さん。私は私の心が分らなくなつて来た。青い日光を浴びてギターの旋律に聞惚れて居た頃は丁度音樂の様

に漢として居てもはてきりしたものが混んで居た和の心たつたに、ひそやかに細な懸心を憚りて強めてそ不二とせん、哲夫さんをひそかに慕ひ始めた可愛らしいあの心。羨しいあの心。おう！濁つた私の心。怖しい豫感を含んで唸つて居るあの波の遠鳴。動いて居る。逆巻いて居る世の中の叫びが私の心を悩まして居るのだわ。静けさが欲しい。海の様な豊かさ。ヨット。津田さん。波。くねくねした波だ。うねくねく美と醜を吸込みながらも豊かな美しさを失はない海。あつ、さうだ。無数の砂も、無数の松原の松も包込んで美しい海だ。私の美の前ではどん男だつて奴隷の様に、砂の様に松の様に。奴隷^{No.1} 津田和郎！

鳶の葉蔭で令子にはつと微笑した。冷やかな麗はしい月の面の様に。然し細々と洩れて来るアロハオエの旋律を頼りに足を忍ばせて庭に廻つた令子は青白く照されたテラスの藤椅子に倚つてギターを弾き居る不二子の静かな情景に狂ほしい羞恥と焦燥に驅られながら心の奥に何時の間にか湧いて来た嫉妬の情にわけのわからぬ涙を滲ませて居た。

2

砂丘の裾に續く松原の間に散在して居る、夏の家で従弟の恭彦と自炊をやつて居る哲夫は朝食後のバットに舌の觸感を味ひながら出て来た。さくく砂丘を登つて行く哲夫の頬をさらさらした朝風がちよいとかすめて通り過ぎながら二拍子の揚音を汀から運んで来た。朝霧の晴れた濛い藍色の海面を滑る様に翔る鷗を追かけ廻して居た哲夫の瞳は岬の鼻を廻らうとして居る赤帆のヨットに凝然と凍付いた。

ヨット。二人乗。津田。令子。俺の影は薄くなつて居る。所詮救はれぬ運命だ。若し昨夜あの時あの場所で俺と津田が代つて居たと、してもやはり同様に令子の欲望は津田の腕を促へて居たらう、あの瞳、押付けた砂粒の痛みが愛情を

通越して心に喰込んで来たつけ。何の潤ひがあつた？何の愛情が示されて居たらう。暗闇の中に蠢めく俺の情欲は確かに照し出された。だがどうしろと云ふのだ、訴へて居た令子の眸、單なる男と女の火花ぢやなかつたか。俺の心と令子の心にとれだけの相慕ふ感情が渦巻き流れて居た？一体令子は俺をどう見て居るのだ。心理の解剖。否、今となつては頑固な科學者の立場を取れと自分自身に命令しながら餘りの恐怖に戦く愚をする必要もなくなつて居る。止めた。止めた。單なる男に還元だ。白い砂漠の砂を熔して美の女神像を捏造して戀を戀するなどは愚の骨頂だ。一億人女が居るとしたら一億分の一の情熱を振撒いてやる方が……。案外女つて奴あそれ位の値打しかないのかもしれない。本能に逆上した一瞬間のみ女は辛うじて人間の標準に達し得るんだ。忘れてしまへ幾度考へても令子も單なる女の一人だ。残念な事にはそれを令子自身が證明しやがつた。俺の心臓を美事に刺貫いて。もう歸つては來まい。虐殺された俺の純情はこの砂丘に、せめてあのヨットの赤帆が岬の彼方にかくれる迄に埋めて仕舞へ。大きく深呼吸だ。キュービットに阿謔は今日限り御免蒙らう。アル、の女“よ、いざさらばぢや。‘‘マントウア公爵様’’を讚美して一億分の一の情熱を一億倍に見せかけて、風の中の羽根の様な……いつも變る女心“の見物だ。噫、全く早い一年だつた。二人が打明け合つたと思つたらもう過去に別れて棲む俺達だ。だが別に悲しくもない。案外落着いたもんだな。幸福と云ふものは憂鬱の中にもあるんぢやないかな。軽い女心だ。生半可な快樂よりもむしろ退屈の方が好もしない。せめて刺貫れた心臓が斷末魔の悶をやつて居る俺の心中の光景を眺めて――

「哲夫さあん」

――眺めて暮らしてやらう。誰だ。不二子らしい。可愛い奴だ。従姉妹似である口許が令子に似て居さへしなければ愛

してやるのに――

「哲夫さあん。お早う。」

――俺は案外浮氣だな。いや残念乍ら事實だ。十人の女の中八人迄は遠ですれ違つてさへ心が動く。情欲が到る所で顔を出してやがる。

「お早うつたらあ！」

「やあ。散歩かい。おや素晴らしいトマトを持つてるね。」

「あら、従姉様達のヨットを眺めてらしたの。岬を廻つちやつたのね。」

「奇麗なトマトぢやないか。」

「私のトマトなの。私の畠なの。」

「美しい色だな。」

「そりやあ私のトマトですもの。」

「果物でも草花でも出来上るのを待つて摘取るのは面白いものだなあ。」

「まあ殺風流な方。」

「君は女だからさ。でも新鮮なトマトは肉見たいな味がするもんだね。一つ呉れ給へよ。」

「さうだね。誰も居ない所で味ふものねわ。トマトつて好きよ。私が育ててるんですもの。此處に来て十日になるけれど一日だつてお水を遣るのを忘れなすことよ。」

「獨りで食べちやふのか。」

「奇麗なんでももの。あらお顔が青いわよ。」

「僕のトマトは枯れて仕舞つたからさ。」

「きつと昨夜寝付きが悪かつたのね。従姉様見たいに。」

「トマトを食べると治るかもしれない。」

「……………。私の家にいらつしやらない。」

「はつ〜。止めて置ませう。」

「散歩して下さらない。」

「はつ〜〜〜。」

「…………。」

「はつ〜〜〜。」

哲夫は新しい煙草に火を點じて虚ろにも荒々しく一吹き吹くと不二子と共に砂丘を降つて行つた。夜露が渴き切らぬ松原の中では青い松葉の薫香が潮の嗅に溶込んで柔らかに漂つて居た。透墜ちて来る強い日射の縞の間を進む不二子の房々としたポップの首筋がリズムカルな陰影の變化の中で無邪氣な媚態を示して追つて來た。

「ねわ〜、貴男と散歩は初めてだわ。」

「わい。」

焦点の定まらぬ可愛い瞳。何を語りたんだね。嬉しさうな微笑だな。悩んだ事のない微笑だ。一年昔の令子のもうだった。甘い鋭いはじけたざくろ。熟れたトマト。四肢が發達した少女。怖ろしい程美しい感覺美だ。

「何故黙つて歩くの。」

「僕は千里眼だぜ。」

「……………」

「はっくくくく。」

一瞬狼狽の色を見せた不二子を素らぬ風に哲夫は續け様に煙を吐出しながら足を早めた。輕ろやかにスキップを續けてついで來る不二子の氣配を背中に感じると益々足を早めた。

「私ん所にいらつしやらない。トマトの氷掛けはとつても素敵な味なのよ。レコードを聴きませうよ。」

「散歩も素敵ぢやないかい。」

「つままないわ。お急ぎになるんですもの。」

「まあ一服してかね。又急ぐぜ。」

「憎らしい方ッ！煙草虫！」

「あつ！君！」

突差にバットを箱ぐるみ奪つて逃出した不二子は二三間跳ねて松の幹からにつこり微笑した。見せびらかすバットの箱でおいでくをやり始める不二子の表情は次第に激しい色調に輝き始めて凄慘な熱情の影の中で金色の蝙蝠が舞ひ始

めた。

無邪氣な悪戯ぢやない。打算的な手段ぢやない。俺の心に巢を喰つて居ると同様な情熱の歪められた表現だ。猛獸の様な迫力だな。感覺の享樂の對照にこれ以上のものがあるものか。女はこれ以外に何物もないのだな。荒々しい砂粒。令子、不二子。一糸もまとはぬ姿を以つて迫つて來る大膽さをあの美しい着物の下に隠して居るとは！若し俺が女だったら女以外の何物も愛しししないだらう。だが俺は女にない何物かを持つて居るんだ。俺の目の光を見る。澄切つた光を溢へてゐる筈だ。たとへ情熱に燒れても少女の美の様に濁りはしない光だ。

「マッチもお出ちなちやん。」

「返へちて下ぢやないよ。」

「駄目。駄目よう。家にいらつちやない。好きな程のまちせてあげましよう。」

「返し給へ！」

「嫌。嫌よ。」

「戲談ぢやあないつたら。」

「嫌！」

「本氣になつたらどうする！」

「戲談よか嬉しいわ。」

「……………!!」

「いらつしやるわね。男々しきスベインの騎士様。」

哲夫は思ひ切つた不二子の自信に満ちた歩取りに惹かれる様に滄浪として歩き出した。松原を横切ると共に強い日射が一束になつて無感覺になつて居た哲夫の脳髓を照し出し、海の様な青空の色とギラ／＼輝く白砂の刺戟は今迄哲夫を苦しめて居た令子への追想を斥け憂鬱な苦惱の力を弱めた。

「お煙草草は？」

「しらぬよ。」

「一本だけ差上げてよ。」

「いらぬ。買って来る。」

「又取つちやふわよ。」

「又買ふ。君に渡す、買ふ、渡す買ふ。」

「持切れなくなるわ。嫌やな方。」

「その時だ。僕の退屈は追拂はれる時だ。」

「よくつてよ。いちめてばかりいらつしやるのね。私はそんな退屈な人間なの？」

「いや。僕よりも君の方がお先に退屈するだらうよ。バットの箱を十も二十も根氣よく奪ふなど閑人の仕事だ。」

「退屈なお話は止めませうよ。」

「はつ／＼。女は退屈しようと思つても出来ないんぢやないのかね。でもね僕は退屈。さうだ深い退屈の中でし

みじみ人生と云ふ奴を味へるつて事が分つたんだ。」

「冷血動物！」

「種物と云ふ方が、あつ！」

ビシヤツ！不二子の掌が素ばしつこく閃らめくと哲夫の首筋で壓し潰された大きな藪蚊を白い指に摘んで差出した。

「まつ！血よ。赤い血。貴男の血だわ。」

「不二ちゃん！」

指先の眞紅の血滴に、眞ん圓るく見開いた瞳に、息詰る様に迫つて來た不二子の内部からの叫びに哲夫は身動も出来なかつた。

無云の一瞬。掴まふとした哲夫の右手を突差にかわして血の指を口にくわへると同時にぐつと見詰めた不二子の瞳。

不二子が顔を蔽つて蹲るとぐつくと嗚咽が鋭く哲夫の耳を突いた。

おう！何と云ふ美だ。凄惨な美だ。感覺だ。眞紅、白、蠕動する嗚咽。凄艶な曲。これだ女の魅力は！おう、不二子の正体だ。いや。美だ。不二子ぢやない。女ぢやない。美だ。戦く肉体の麗しい旋律。感覺の極点だ。トマト色にふくらんだ皮膚の汗。何と云ふ力に満ちた美しさだ。蒸發しない中に甜めすつたら。

烈しい日光の中で、全身を感覺の奴隸にして暴れ狂ふ嵐の力にすべてを忘れた哲夫は油汗を握り締めて立ちはだかつて居た。細々く斷絶する不二子の嗚咽に美の快感を楽しみながら足許に轉がつて居るトマトをぐちゃぐちゃに踏み碎きながらも哲夫の兩眼は鋭く不二子の光景を見据へて居た。

「自炊も食つた後の仕末が悪いなあ哲公。どうする。俺は嫌になつた。」

「放つとけよ。どうせ明朝になりやあ食欲が洗つて呉れるさ。」

「こうなるとつく／＼女の有難味が分ると云ふよりも男に生れた有難味が分つて來るぜ。」

「實際女つて奴あ實際的に出來上つてゐるからなあ。あれ位に精神的方面が缺けてりやあかへつて幸福かもしれん。

過去も未來もない代物だ。唯現在あるのみ。感覺あるのみ。至つて簡単な代物だ。おい恭公。男に生れつゝいたのは確かに失敗だぜ。」

「神の失敗に依りて女は創造されぬと何時だつたか牧師の説教を聞いたがな。勿論まともな説教ぢやあるまい。」

「はつ／＼。一浴びするか。どうにも仕様のない事だ。夕方の海も好いぞ。」

「そうだと。後片付けなど仕様がない。安茶餉臺に汚ない飯盒。」

「十錢罐の蓬來煮。」

「だらしないのに糸莧蕩。ヘシ拵げられた蓋の裏。油塗みれで毒々し。」

「一人は夕食の残物をほつたらかして赤禪を締めると窓から跳出した。」

「横に轉つた禪庵の尻尾。か。」

「余りに水氣がなくなつて。だ。」

「余りに水氣がなくなつて、色氣抜きにも程がある。」

「色氣抜きにも程がある。はつ〜〜」。

「おい哲公、海迄競走だ。一〇二〇三。」

恭彦がはね上げる砂。真紅に染まつた海に反射する夕陽にきらめく砂粒を浴びて哲夫は懸命に追ひ始めた。力と速度の張切つた調和に本能的な快感に野蠻の様に、汀の手前の低い砂丘に馳け登つた哲夫は遮切る様に乗付けて来るヨットに立凍んで仕舞つた。赤帆を背景に白のセーラーパンツの令子。キールを巻揚げて居る純白のセーラーパンツ、令子。遅ましい津田の腕を離れた舳の錨は銀色のハート型を夕日にギラリと輝かせて半圓を畫くと血の様な海に飛沫を立てて落込んだ。畜生共！あゝ何と云ふ幸福さうな二人だ。何と云ふ強烈な赤いヨットの雰圍氣だ。海原、快走。小さなヨット。二人のヨット。風を孕んで何處迄進んだんだ。畜生！嫉ましい情景を何故に！かく迄止めを刺して俺を八ッ裂きにするのだ！かく迄も俺の純情を弄んでも飽足りないのか。令子。妖婦！

「おい。お先に失禮して浴びて来るぜ。」

「……………」

「色氣抜きにも程があるうとゴリヤ。」

飄然と海に跳込んで行く恭彦の後姿に、暖かな皮肉に、哲夫は突然水をかけられた様に理性を取戻したがぐつと抑へ付けた憤怒は激しい嫉妬となつて心に喰込んだ。砂にのめり込む足は餘りの力に震へて居た。左腕を右手で右腕を左手でかつきと掴んで腕組みをして居る廣い胸は脈々と波打ち始めた。次第に冷めて行く感情は凍つた様に。脳髓は氷の様に透きとほり、密封された嫉妬の青い焰は鱗の様に。口許を引きつらせて睨んで居る哲夫の視線の中を津田に抱かれて

汀に運ばれた令子は青ざめた顔に何の表情も現はさうとせず静かに立上つて向合つた。

お面の様な表情だな。ミイラの様な恰好だな。美事な一ヶの静物だ。それがお前の姿なのか。あの生き／＼した頬の色は、甘い香は、一体何處に忘れたのだ。何と云ふ悲劇だ。藝術的な美の情景だ。令子よ。つた静物よ。これが俺達の愛情の断面なのか。情熱の残骸なのか。津田の奴心苦しさうに帆を下ろしながら俺の視線をごまかさうつてしてやがるんだな。若し俺が女だつたら。無智だつたら腕の限り、命を賭けて暴力を……。誰のためだ？令子。俺。令子は既に離れて行つたのだ。噫、此の憂鬱な鬱情を誰のために晴すのだ。誰が慰めて呉れるのだ。幸福に逆上して悠然として居る令子よ。俺の最後の、最早用のない男の最後の像を心に刻みつけろ、呪はれてあれ。幸福が不幸の仮面である様に今俺は假面を被つてお前達の幸福を祈つてやらう。不幸を祈つてやる。女共に呪ひあれ、いや令子に。令子よ死んで仕舞へ！重苦しい緊張に堪へ兼ねた様に令子は一步近寄つた。二歩、三歩。傲然と立ちはだかつて居る哲夫は張詰めた激情が哀願に満ちてうるんだ令子の腫の光に見る／＼中に知らげられて行くのをどうする事も出来なかつた。

「哲夫さん。」

「うむ。どうだつた？」

「随分長い一日だつたわ。考へたわ。考へ続けたの。」

「あ。」

「考へても分る事ぢやあないわ。私、私何と申してよいか分らなう。」

「言はなくつても感じられる事だ。感じなくとも。令さん、僕は感じられなくとも見た。はつきり見せられたんだ。」

此の場に僕が出るのは間違ひだ。僕は君達が見えない所に逃げて行きたいんだ。でも……しかし、しかし何か力があつて僕を此の場から一步も動かして呉れないんだ。」

「……………」

「……………」

「私、どうしてこうなんでせう。」

「あゝ何んにも考へられなくなつて来る。」

「……………」

「唯、分つたのは悲しい結果だと云ふ事だけだ。こうして居るのが苦しいだけだ。」

「……………」

「若し僕が落着いたら今晚會はない？花火大會があるんだつてさ。皆で行かう。」

「哲夫さん！」

ほろりと令子の頬を涙が傳つた。哲夫は顔をそむけて歩き出した。はふり落ちる涙を小指で抑へながらついて来る令子の苦しいデレンマを敏感にも感付いた。哲夫は何時の間にか消え失せて居る嫉妬の憤怒に代つて唯愛戀の情のみが強く心の底から湧上つて来るのをどうする事も出来なくなつて居た。大波の様にうねつた砂丘の底を逆光線を浴びたひよる長い影法師に導かれて二人が第二の砂丘の頂上に登りつめた時、青いワンピースの不二子が風の様子に駆け上つて来た。

「まあ、あらお從姉様！」

「……………」

「……………！」

「……………」

「津田さんは!!」

「……………」

「哲夫さん。從姉様!津田さんは?」

不安から絶望へ。絶望から嫉妬へ。ぱつと燃上つた不二子の視線。狼狽から反抗に變つて行く令子の眼差。惡寒に怖れを懷いた哲夫。憎惡に満ちた沈黙の一瞬に哲夫は狂ほしい不二子からの情熱と殘像の様な令子の愛情の間にはさまつて歪みを見せる心に自分自身と云ふものに自信を失つて去就に迷つて居た。

戀とは何物だ。愛情とは何だ。偶然起つて來た感覺の火花なのか。動物的な本能に呼起された特種な感情なのか。不二子よ許せ俺の心は令子に強く惹かれて居る。令子よ、一年間の純な執情の此の悲しい破目は或は一人の女のみに凡てを打込めない俺の心の内部に潜む或力に必然的に藏されて居たのかもしれない。噫、何と云ふ人間の醜さだ。俺の醜さだ。令子よ、お前に對する俺の愛情とても、僅一日の不二子と二人つ限りの交際で芽生へた愛情と異種のものではない様だ。交錯して居る二人の女への二ヶの愛情だ。結局量の問題なのか。動物的な本能を無意識に醜いと見做す智力それ自身は更に打算と云ふ一層醜い活動をやつて居るんだな。噫、量の大小だ。打算の連続だ。これが人生なのか。さうだ

とすれば俺は俺自身が分らなくなつて来る。さうだとしてもそれだけでは到底満足出来ない感情がある。もつと純な、美しい感情があるんだ。しかもその裏側では絶へず醜い影が蠢めいて居るのだ。何と云ふ悲しい矛盾だ。矛盾を統一する力は何だ。俺自身は矛盾だ。統一する力は？

既に哲夫は二人の無言の争ひの外に脱れて居た。自分の愛情について既に自信を失つた哲夫が不二子には勿論、令子の前ですら恥しい自分の心を寂しく見詰めながら再び海の方に踵を返さうとした時先刻立つて居た砂丘の頂上に夕日の最後の光を背に受けた津田の黒い姿が勝鬨を擧げる様に亂れた頭髮を輝かせて居た。しかも砂丘の中腹に凝然と棒立ちして居る恭彦の視線は儂ない愛情を示して不二子に注がれて居る様だつた。微妙な糸に繋られて絡み合つて居る人の世の愛情の世界の此の縮圖の中から惨めにも逃れて行く哲夫の心の中に大きく擴つて来るものは既に殘骸となつて居る令子の想出だつた。美事な静物の様な令子の印象を包む様に冷たい夕風が哲夫の胸に吹渡ると白い世界が挽歌のリズムに乗つてしず／＼と擴つて來た。夕日は沈んだ。紫の色が靜かに砂丘の上に匍降りて來て一變した高尚な雰圍氣の中で令子と津田の一日の經緯を象徴する様にヨットの赤帆がはためいて居た。

俺に惹付けられて苦しむ不二子。少年の様な戀心をひそやかに不二子に懷いて居る恭彦。俺。俺は案外落着けた。案外何の氣持も感じられなくなつて來た。やられたんだな。やられたんだ。

4

夜の海水浴場では安建築のペンキが田舎染みたケバ／＼しい裝飾電燈に反射して都會好み此の田舎町の悲壯な縮圖

を示して居た。『夏の家』々から出て来る涼みがてらの優雅な洗練された足取りと町から繰出して来る逞しいが落着のな足付きが新聞社の廣告塔の下で渦を巻いて居た。海に面したバンガロウ式のレストランではレヂスターが景氣の好い音を響かせて居た。その二階の卓を圍んで居る四人は押黙つてお互の沈黙を疑ひの眼で眺めて居た。馳引と馳引が打算から打算を産み出して交錯するのに堪はられなくなつた様に恭彦が眼をそらして向側の野天舞臺を眺め始めたのをきつかけに不二子も、令子も最後に哲夫も無意味な見物を始めた。急造舞臺の裸電燈の下で町の青年達が『義經千本櫻壽司屋の段』を夢中になつてやつて居た。觀衆は小馬鹿にしながらも『いがみの權太』の臺詞にはやけに拍手喝采するので役者はすつかり乘氣になつて居たが折悪く仕掛火花が始まつたので一時に浮立つた人足に舞臺は明るく取殘されて仕舞つた。

「あゝら嫌やだ。權太が止めちやつてよ。」

「梶原様も、嫌だぜ、火花見てる。」

「あゝらまあ。私も見に行きたいわ。」

「行るか。」

哲夫は頑くかな沈黙を續けて居た。令子も意地を張つて居た。しかし恭彦と不二子が並んで出て行く後姿を見送りながら悲壯な漫畫を眺めた様に哲夫の眼差は思遣りの情にうるんで居た。令子はブレンセーダを含んでちつと見詰めて居た

「生首よりも火花がいつてさ、かね。」

「哲夫さん。何故陽氣な振りをなさるの。」

「梶原様も火花御見物つて時だもの。」

「反對の表情をなさるのが貴男の癖だわ。」

「君が度胸を据わてる様に、つてのかい。」

「さうさね。少くとも此の濱に来る迄はこうぢやなかつた。一休君は落着いてるのかい。僕にやあ蔭張り見當がつかない。」

「さうねわ。」

「勿論こうなりやあ悪あがきなぞやりたかないよ。唯君の氣持をはつきり言つて呉れ給へ。」

「はつきりなど言へないわ。はつきり云へば形式的になるんですもの。だつて私はどうしてこんなになつたのか分らないんですもの。私の心を全部お見になつたら驚くのは貴男許りぢやないわよ。津田さんだつて、不二子だつて。」

「今更そんなものは見たかあないよ。今更そんな理屈っぽいもの見たところで僕には苦しいだけだ。」

「私どうしたつて貴男の事が心から離れないの。御免なさいね。哲夫さん。今更こんな事を云つて。」

「僕が君の事を少しも忘れたくないと云つたとしたら君は又津田さんの事を考へるんだらうよ。」

「わい。さうなるかもわからない。でも不二子が貴男に接近しようとするのを見ると思はず嫉ましくなるわよ。その癖に貴男を慕つてる不二子の氣持にはいつも同情してゐるんですもの。これが本當の私の氣持なの。恥さらしだわ。貴男の前でこんなことを云ふなぞ恥さらしだわ。」

「有難う。令さん。僕は心残りなく斷念するよ。」

「まあ、哲夫さん。」

「……………」

急に口をつぐんだ令子の表情が再び凍りかけた時、威勢のよい爆竹の音と共に黄い光が暗い海面を走つた。どよめきの中から舞上つた花火は一時に艶な色彩を展開した。赤玉、緑玉、白玉、玉は白熱光を引いて左右に流れながらふわ消れて行つた。

「御覧、美しいものだ。一瞬間が生命だつたのさ。永遠つてな事が嘘だとやつと分つたよ。」

「男つてそんなものかしら。哲夫さん。今迄の事嘘だつたの。」

「いや、遊戯の積りぢやなかつたんだ。随分眞面目な氣持だつた。」

「私も、私も。」

「然し人間の口つてもものは案外嘘吐きが上手なんだ。言ひたい事も言へないものだ。」

「……………私も、随分嘘付きだつた。」

「うむ。もう仕方はない。一体言葉等好加減な記號だもの。不完全な形式ぢやないか。權太の臺詞だつて美しい嘘ぢやなすか。」

「何だつてこんな所に避暑しんでせう。」

「閑があり過ぎたんだ。贅澤な生活から氣紛れに跳出して來た非生産的な感情だよ。遊戯だと言はれても仕方はない君だ。其を戀し始めた女は決して一人の男を戀する事は出來ないだらうよ。」

「そりやあ私も偽つてたのは悪かつたわ。苦しかつたわ。でも初めの中に貴男が怒つて下すつたら。嫉妬して下すつたら。」

「うむ、權太の臺詞は嘘は嘘でも美しい情がありやあこそだ。そりあ内心は嫉きもしたさ。だが僕が眺めてた君は蒸溜された君だつたんだ。性など超越したものだつた。」

「あんまりだ。あんまり利己主義な貴男だわ。」

「うむ、合憎君が云ふ様な情熱は持合せて居なかつたんだ。夫婦ぢやあるまいし、街の女と遊人でもあるまいし。いや、戀愛遊戯に恥けるモダンな本能主義じやあるまいし。」

「貴男見たいに精神と肉体を分折し過てるのは誤りだね。疑いたくもなるわよ。まるで盲目の羊だわ。」

「うむ、盲目だ。戀の盲目だ。見えない戀の正体を懂れて徒らに苦しんで來たに過なぎいのだ。夫婦だつて所謂戀人同志だつてその心と心をつきつめて御覽。結局欲望の打算以外に何が残つてる!!僕はもつと純な、美しい感情から出發したいんだ。して來た。せめて結婚迄は此の氣持でと……。結局夢を夢見た結果になつたんだが。」

「……………」

「他に云ふ事はない。あつても……用のない事だ。」

「どしよう。どうしませう。」

「もう一度眞面目に偽りを言ふ事だ。」

「駄目、私、そんな事は言へない。」

「さうだ、それで終りだ。」

椅子を蹴つて立上つた哲夫は言ふだけ言つた後の快い氣持を味ひながらレストランから出ると雑踏の中を縫つて渚の

方に歩いて行つた。第二の花火は變化に富んで波に映つた。蛇行する緑の花火、巴に荒れる黄の火箭、赤い花車が凄じい火柱となつて冲天に立昇ると音もなくさつと開いて天蓋の様に哲夫の頭上に被さつて來た。然し美しい幻影の様な光彩が消れると共に哲夫は寂しい氣持に襲はれた。

形式の中で眞心は花火の様に瞬間しか姿を表はさないのだ。一切の眞實は面と向ふと言葉の中から影を潜める。可愛想に冷めた愛情を抱締めて見せ様とした令子！あゝ、俺にとつては何と云ふ痛々しい光景だつた。おう、何と云ふ白い人生なのだ。空虚になつた俺の心だ。『いざさらば令子』！一体今朝から幾度繰返して居る言葉だ。いま／＼しい奴！此の言葉の創造主は、俺をかく迄苦しめる貴様の正体は何物だ。有餘つた情熱の記號か、それとも小賢しい腦作の形式か。思切つても忘れられぬ令子の面影か。さうだとしても一体令子はどれ程の女だ。不二子だつて。いや數限りない女が居るぢやないか。さうだ。不二子だ。一体令子の何處がよいのだ。もつと美しい女は居る。もつと優しい女は居る。もつと頭のある女も居る。一体何處に魅されたのだ。……あゝ。駄目だ。何と云ふ意氣地無しだ。何故だ。令子を批評すればする程俺の心は苦しくなる。如何に批評を加へても令子の香はやつぱり甘いのは!!。これが俺の人生なのか！俺の人生は歪んで來た、令子への愛着と不二子の磁力の間を蛇行するとしたら完全な亡者の存在だ。人間的な墮落、余りに人間的な。二十年來大切に育てて來た純情は一体何處に行くのだ。俺の人生は丁度心臓の様に醜惡な血の塗替へに忙殺される——汚れはてたペンキ職人——此が青春だとすると俺は死ぬが死ぬ迄青春に首根ツ子をを押し付けられた貧弱なペンキ職人なのか。欲望の暴虐に酷使されながら盲目滅法ペンキを捏ね廻して生きて居るんだな。職人にしろ、俺にしろ今に苦悶がやつて來るぞ。肉体保存。純情保存。いや／＼奴も俺も今に苦悶に襲はれるに違ひない。欲望が盡きる

かそれとも苦悶に堪へて欲望の奴隷になつて仕舞ふか。これが俺の青春なのか。たつたこれだけが!!

考へ詰めて來た哲夫は雜踏の中から迫つて來る無数の感覚がいとはしくなつて渚傳ひに砂丘の方に歸り始めた。物足りぬ狂ほしい氣持は人波のどよめきから遠退れば遠退る程はつきりてし來た。美しく蒸溜されて甦返つて來る令子の愛の想出に悲しみの心を疼くにまかせて重い足をひきづつて居る哲夫は滲み出して來る涙を拭はふともしなかつた。しかし突然松原の中から跳出して來る黒い少女の影にぎくりと立止つて顔をそむけた。

「待つてたわ、みんなお從姉様から伺つたの。」

「不二ちゃん。何んにも言はないで呉れ給へよ。僕は獨りで居たいんだから。」

「……………」

「……………」

「恭彦さんだつてきつとさうわ。早く歸つてあげて頂戴私だつて。」

「わつ、恭公が何か云つたんだね。」

「わい。」

「君が答へたんだね。」

「わい。私だつてよ。私だつて恭彦さんと同んなじだわ。」

「僕だつてだ。」

「早く歸へつてあげて頂戴、私だつて獨りで居たいの。」

涙を溜めて居る不二子に一切を了解した哲夫は急に可愛想になつて靜かに愛撫しながら歩き始めた。青白い日光の砂の上を歩きながら二人は互に顔をそむけて居た。

「さううまく行くもんぢやないんだ。」

「分かつたのよ。先刻恭彦さんから打明けられた時やつと貴男の御心が分つたわ。うまく行くもんぢやないものね。でも貴男が憎しいわ。」

「僕だつて令さんをさう云ふ風に思つた時もあるんだ。」

「どうなさる？」

「うむ。」

「時が経てば忘れられるものかしら。」

「忘れらる!! 忘れられるものか。不二ちゃん。嘲笑するならしたつてよい。令さんは僕にとつて唯一人の人なんだ。僕は津田さんの腕の中の令さんでさへ愛してるんだ! 馬鹿と云はれても、意氣地なしと云はれても僕はやつぱり思切れないんだ!」

「……………!」

「少女が人形を愛する様に僕は何んにも令さんから望んで愛してるんぢやないんだ。これが僕の本心だ。これが君への餞別だ。」

「哲夫さん!」

不二子には激しくむせんで馳出した。狂ほしく馳去つて行く不二子の後姿を溢れる人の中から見送る哲夫の耳に嗤笑ふ様に人波のどめきが鈍く傳はつて來た。

何と云ふ運命の神の悪戯だ。悲劇の二重奏だ。三重奏だ。悲劇は悲劇を産んで、罪から罪を作り出す子宮が存在する限り無垢な若人は苦むのか！何と云ふ残酷な青春だ。傷ける少女の心よ。濁り行く無垢な光を見詰めるには餘りに繊細な乙女心だらう。迷ふな。トマトの様に、香はしい色艶を、甘さを大切に。不二子、恭彦、俺、噫、何と云ふ残酷な運命だ。何と云ふ苦惱に満ちた人生の船出だ。おう！令子、令子！久遠の愛情だ！

さん／＼と流れる熱い涙を流れるに任かせて銀色に輝く海を見詰める哲夫の横顔に、折から打揚げられた第三の花火が赤く反映して不動明王の様に照し出した。

——一九三四、一——

(改作青春の關所)